

な「水」を飲んでいますか？

夏の夕暮れ、クラブ活動を終えて駆け寄った校庭隅の水飲み場。蛇口から勢いよく流れる水がのどを潤してくれた。学校でも公園でも子どもたちが蛇口の前に列をつくった。そんな当たり前の光景がいつしか珍しくなっている。

背景に水質汚濁問題

「子どもの頃は、鉄管ビールを飲もうって蛇口をひねったよ。うまかった」と「日本ミネラルウォーター協会」専務理事の岩田芳久さんは笑う。同協会によると、ミネラルウォーターの生産量はこの20年間で20倍に拡大、水道水をそのまま飲む生活習慣は、小中学校では水筒持参の奨励に、家庭ではペットボトルのミネラルウォーターに替わった。

1960年代後半から、合成洗剤の大量消費などが原因で生活排水による水源の汚濁が深刻化、マンシヨンの貯水槽の汚染や、発がん性を疑われたトリハロメタンが注目されるなど、都市部を中心に水道水は信用を失っていった。東京都水道局調査係長の中村考一さんは「当時の金町浄水場（東京都葛飾区）の水はかび

臭くて、苦情も多かった」と振り返る。

岩田さんは94年の濁水をタリーニングポイントに挙げる。

「スーパーで水を買わざるを得なくなった。飲んでみると、水道水よりおいしくて、健康や自然への消費者の意識の高まりもあり、産地のはっきりした水にはお金を払うライフスタイルが生まれた」。水道水への不信、持ち運びしやすいペットボトルの普及、人々の志向や意識の変化が重なった。

持ち歩きは少数派

ミネラルウォーターはほかの清涼飲料とは全く違う売れ方をする。売れ筋は大型の2リットル入りで、7割を占める。持ち歩くのではなく、家庭での飲用が利用の大半だ。

岩田さんは「増えたとはいえ、一人あたりの消費量はアメリカの5分の1。まだ需要は伸びる。人が飲む水の量は

しているから、これで日本の水源が枯れることはないと思う。ほとんど無菌で開栓するまでは絶対に安全」と胸を張る。

一方、水道も信頼回復に懸念だ。飲み水として水道水に満足している人は2003年でわずか28・1%（東京都調査）にとどまった。

中村さんは「以前から水道水の安全性は問題なかったし、03年の時点で水質はかなり改

善されていたが、まずいというイメージはなかなかなくならない。水道水を飲むなど教えられた世代が親になり、子どもに飲むなど教えてしまう。今の水道水は飲んでほしいし、飲めばおいしさが分かってもらえる」と話す。

少子高齢化も影響

東京都水道局は92年に、金町浄水場にカビ臭やトリハロメタンの元となる物質を分解できる「高度浄水処理」を導入、04年から「安全でおいしい水プロジェクト」を開始した。13年度末までに東京東部の利根川水系の全浄水場で高度浄水処理率を100%にする計画だ。古い水道管の取り換えも進めている。

この結果、09年の調査では満足度は46・6%にアップ。80年代に「日本一まずい水」と称された金町浄水場でも苦情はなくなったという。同浄



提言



大切なのは「地産地消」
循環の中に水を戻すことです!

吉村和就さん

(よしむら・かずなり) 1948年秋田市生まれ。国連環境審議官などを経て、2005年から「グローバルウォータ・ジャパン」代表。麻布大学客員教授。著書に「水ビジネス—110兆円水市場の攻防」(角川書店刊)などがある。

この写真のみ・撮影/墨 威宏

水場の水はボトルドウォーター「東京水」としても販売される。高度浄水処理は大阪市などでも導入されている。だが、マンションなど建物内の配管や貯水槽の老朽化で

水道水が汚染される可能性は残る。特に近年は少子化、高齢化で学校でも集合住宅でも水の使用量が減り、貯水槽での滞留時間が長くなって水質が悪化する事態も起きている。

97・4%の水道普及率があり、きれいで安心・安全な水が出て当たり前の日本は、世界でもまれな幸せな国。水道がインフラとして整備され、維持管理されてきた結果だ。水に関して日本は世界一の技術も持っている。

ただし、地方では人口減や高齢化で、水の使用量が減り、設備の老朽化対策ができず、いままでも当たり前だった水の安心・安全が維持できなくなっている。地下水もどれくらいあるのか分かっていない。水は大丈夫といえる科学的根拠は何もない。

日本は周りを海に囲まれ、地域の中での水の「小循環」がうまくできていた。海から水分が蒸発して雲になり、雨が降って川を流れて海にかえるまで、ヨーロッパや中国など大陸では1週間から10日間

このため東京都水道局は水道管から直接給水する「直結給水方式」を提案。蛇口から水を飲んでもらおうと、公立小中学校への導入を進める。よほど味に敏感でない限り、

かかるが、日本の雨は1泊2日で海にかえる。日本は常にフレッシュな水がたくさん循環する状態だったから困らなかった。

水は環境に悪さを与えない程度に使い、使った水はきれいにしてその地域の水循環の中に戻してやるのが大切だ。ただ、これからは日本にも水危機がやって来る。日本の水資源は約2、3割を梅雨や積雪でカバーし、足りない分は台風のもたらす雨が補っていた。北陸や東北では稲作に雪解け水を使っている。温暖化が進めば、梅雨がなくなり、雪が積もらなくなり、稲作ができなくなる。そうすると、この列島はすぐに干上がってしまうだろう。

水の問題は、国家の安全保障でもあり、水と食料、エネルギーの三位一体で考えなければならぬ。(談)

冷やして飲めばミネラルウォーターも水道水もほとんど差はないといわれる。どちらがより安全とも言い切れない。生きていく上で欠かせない飲料水。さて、あなたは、どんな水を飲んでいきますか——。

フリーライター・墨 威宏

ミネラルウォーターとは

日本のミネラルウォーター類は農林水産省の「品質表示ガイドライン」で、原料などからナチュラル、ナチュラルミネラル、ミネラル、ボトルドに4分類される。

ボトルドウォーターを除き、地下水のみが原料。日本では沈殿、ろ過、加熱殺菌は認められ、それ以外の加工が加わるとミネラルウォーターとは呼べない。水道水を詰めた「東京水」はボトルドウォーターに分類される。

日本の家庭向けのミネラルウォーターは、カレーのチエイサー用として1983年に発売された「六甲のおいしい水」(ハウス食品)が先駆けという。当初は「牛乳やガソリンよりも高い」と酷評されたものの、89年以降、大手飲料メーカーなどが参入し市場が拡大した。現在は国産800銘柄、輸入2000銘柄ほどが流通している。